

詞言も、古き事なりと知られけり。

○右衛門橋

元祿六年の土帳に、右衛門殿橋と見れ、金澤橋梁記にも、よもんどの橋長町四番丁高也とありて、元祿・享保の頃はかく稱せしと聞ゆ。舊傳に、昔藩士富田右衛門といふ人の邸宅、此の橋側にありしゆゑ、橋名に呼べりといへり。按ずるに、菅家見聞集に、寛永七年六月前田肥後と村瀬九右衛門せがれ四郎右衛門等と右衛門橋に於て喧嘩すること見たり。三壺記には、富田右衛門佑の前なる橋まで出づる間は侍町也。肥後殿鬼川の橋ぎはへ行懸り給ふ處に云々。とて、喧嘩の次第を載せたり。菅君雜錄には、鬼川橋爪にて喧嘩の事を記載し、註に、此の橋富田右衛門居邸の前なる故に、世人右衛門橋と號す。とあり。今按ずるに、右衛門橋は惣構の橋にて、倉月用水川に架けたる橋なり。されば鬼川の橋にあらず。然るを三壺記に鬼川の橋とあるにより、菅君雜錄にも其の誤りを請けて、右衛門橋は鬼川の橋なるよし註したるなるべし。但し彼の喧嘩せしは、長町四番丁なる橋爪にての事なりけん。此の橋は鬼川に架けたる

により、鬼川の橋とはあるならんか。

○富田右衛門番邸

三壺記に、寛永七年前田肥後鬼川橋爪にて喧嘩の條に、富田右衛門佑の前なる橋まで出づる間は侍町也。と見れ、また、裏づたひに富田右衛門佑方へ入り、表門へ出で、高岡町へ引取らる。ともあり。されば右衛門が居邸は、右衛門橋の橋爪にて、若しくは橋の高なる敷の内なる地ならんか。

○富田右衛門傳

三壺記に、右衛門佑とし、又或は右衛門尉とすれど、寛永四年の土帳等には、右衛門とあり。竹園雜記に云ふ。富田下總守は八千石餘の祿成りしに、右衛門尉代には、與力知共一萬石成りしに、後富山侍従利次君の御家老に附被遺候時、八千石は嫡子圖書へ被下、残る二千石は右衛門尉に隠居知として被下也。是富山へ附罷越儀迷惑仕由に付いて、右之通被仰付。富山にては案の如く、圖書養子は奥村藏人嫡子縫殿助にて、千五百石の與力知被召上、本知六千五百石被下、又縫殿助實子監物へ大藏大輔正甫卿三千石被下、子孫段々減じたりといへり。今按ずるに、富田下總守は、慶長

十年の利長卿富山養老附土帳に、八千三拾石富田下總と見れ、大坂夏陣大筒定書には、八千二百二拾石富田下總守とあり。元和元年の土帳には八千石富田下總とあり。寛永四年の土帳に、八千三百三拾石富田下總・五百石富田右衛門とありて、長九郎左衛門と富田下總を人持一組の組頭とす。さて寛永十六年富山・大聖寺分封の時、富田右衛門は富山侍従利次君へ附けられ、家老役を勤め、子孫富山に連絡たり。今枝直方自記に云ふ。或人の曰く、淡州主の御領改作に被仰付處に、富田右衛門尉申すは、改作は成間敷と申す。子細を密かに聞きける處、右衛門百姓に借物を致し、媒は東野某といふ者也。然る處に微妙院殿江戸參觀の砌、富山淡州主爲御見送何といふ處へ御出合之刻、御談合有りて淡路殿早速歸館し給ひ、東野をば成敗被成けり。富田右衛門は夫れより御前悪敷有之處に、翌年微妙院殿歸國し給ふ時、富山にて淡路殿御膳を上げられたり。此の時右衛門は如何と御意の時、罷出でければ、色々御悞の御意にて、御服など拜領せしとぞ。頭書に云ふ。東野、名は三郎左衛門と云ひ、大殿よりは引張切と被仰しを、淡州主御詫言に

て刎首になる。檢使は入江權兵衛と又一人也。とあり。又混見摘寫に云ふ。淡路守利次君御家老富田右衛門尉、江戸より富山へ歸る時、越後國山の下旅宿に於て病死す。板津檢校と日頃入魂なりしが、右衛門尉死後四十餘年を経て、板津檢校江戸へ赴きける時、越後國能生名立邊の旅宿に一泊せしに、其の夜夢中に富田右衛門尉と良、久しく對話し、夢覺めたりけり。明朝に至りて、板津檢校宿の亭主に、先年富山の家老富田右衛門尉といひし人、當國山の下の旅宿に於て死去したりと聞く。其所は何方なる哉、若し聞傳へたる事もありやと尋問なしけるに、宿主答へて曰く、僕は其の頃いまだ幼少にて覺無御座、愚父が物語を聞き居たり。富田右衛門殿は則ち此の家にて死去されたり。其の時愚父種々痛はり申せしよしみを以て、今の富田縫殿どの今以て往來毎に立寄られ、御懇意に被成と語れり。板津檢校此の話を聞きて、甚だ悲涙淺からず。其以前は儒者なりしかど、是より佛法に歸依す。といへり。按ずるに、富田右衛門が逆旅に死去せしは、正保の頃などにや。夫れより四十餘年後は貞享の頃ならんか。板津檢校は、寛文二年の由緒帳